

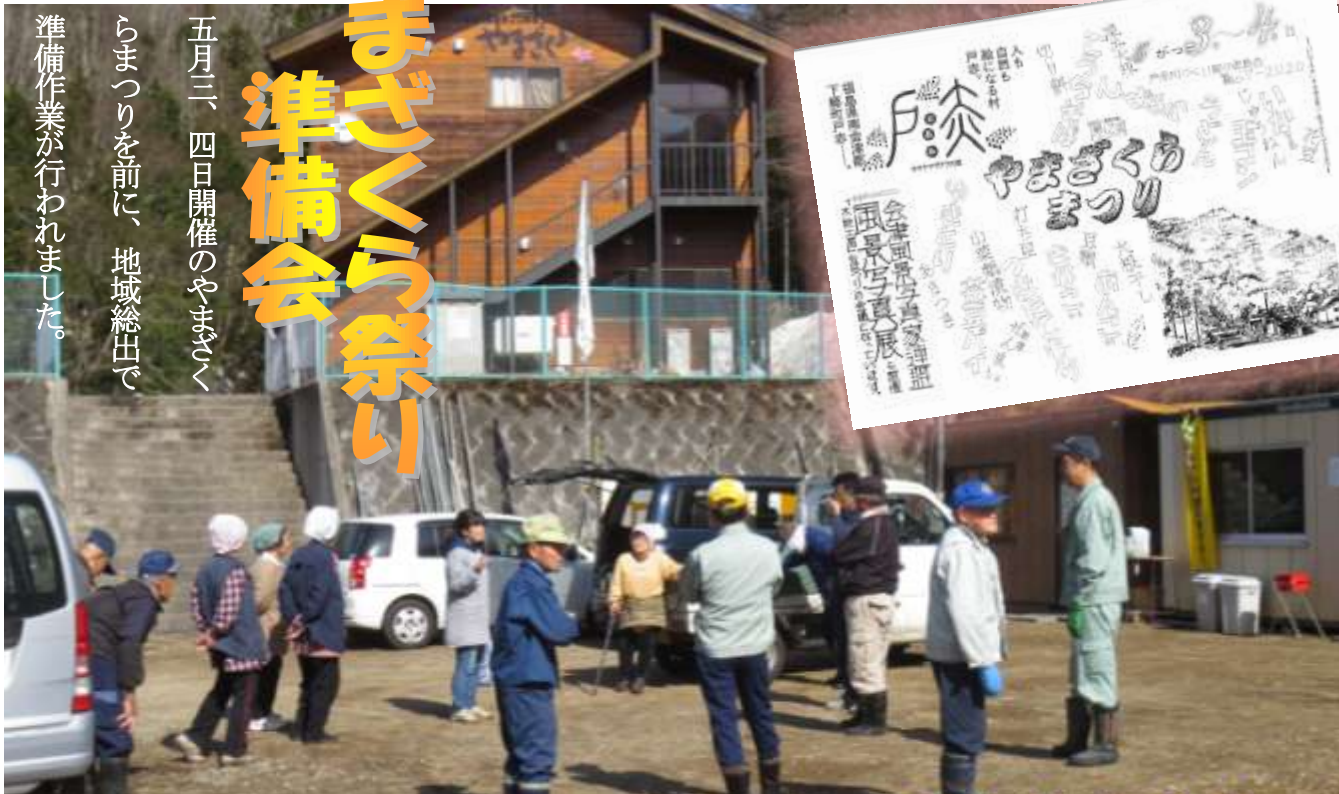


# 山桜の里 戸赤

4月24日新聞折り込みチラシ  
町内 1,600 枚配布

## やまざくら祭り

### 準備会



五月三、四日開催のやまざくらまつりを前に、地域総出で準備作業が行われました。



4月19日やまざくら学校の雪囲い撤去、校内掃除など作業前の打ち合わせ



食器等資材確認、食材出し、前日のもち米準備、てんぷら具材の入手、物販量目と販売価格など前年の例も参考に詳しく打合せ



テント設営、ソバゆで釜・水回り給排水据え付け撤去、案内看板掲出撤去など段取り

【木地の学習No.54】絞皮は木賊と同じく木地を磨くヤスリである。これらの品は、おそらく木地小屋仕送りの一般的なものであろう。宿駅では運送の荷物に荷口銭という通行手数料を取られるが、若松から鶯ちや馬に付けてくる木地師の飯米については、荷口銭がとられていなかったようである。…(これは)関川村の木地師が肝煎を通じて代官所へ願い出た文書の下書きで安政四年の文書と思われる。さらに「…」とあり、従来より木地荷、味噌等は口銭なしで通行できたので、その通りにしてもらいたいと願い出ている。近世、近代を通じて会津各方部の木地生産に関する統計的な資料は見いだせない。わずかに断片的な記述があるばかりで、まして田島町の木地を論ずるに足るものは皆無といってよい。従ってここでは傍系資料を交えながら木地生産や金額から田島町の木地生産高を類推するしかない。ちなみに『南会津郡誌』(大正三年刊)は、若松へ運ばれる木地椀の七割は南会津産のものであるとしている。古い記録としては、『家世実紀』巻一五六、寛延元年二月二十三日の条に、「延享四(一七四七)年、南山にて挽候木地代四〇〇両」とあり、小荒井組の塗椀代、享保元年三二五両二分余、延享三年三〇五両二分余、山三郷大谷組、延享三年三〇両余と記している。高野組書上には、文化六年六〇両、文化七年五〇両とある。当時の高野組の木地小屋は針生のみであったと思われるので、これは五、六軒で挽いた木地の金額をと考えてよさそうであるが、同時期の上三依や横川の木地差引帳と較べると少なすぎるようである。「(会津地方歴史民俗資料館『木地語り』より) (つづく)」



# 川が変わる



れきの  
ひとコマ



3.3.30 福島民報

**戸赤の山桜**

山の斜面に明治時代から100年以上も大切に守り続けられてきた薄紅色オオヤマザクラやカスミザクラが美を競います。

会津下郷町戸赤山桜  
アクセス/JR磐梯西線会津若松駅  
乗り換え、会津鉄道会津下郷駅から車で約20分。東北自動車道白河インターチェンジから車で約70分

会津下郷観光協会  
TEL 0241(69)1144

携帯電話でQRコードを読み取り、表示されたURLへアクセスしてください。

## 第12回

# やまざくらまつり

5月 **3** (日) ~ **4** (月)

あそびの学校やまざくらの「そば打ち体験」

作って食べて

町内観光地をとめた案内パンフレットの1ページに戸赤のやまざくら学校での体験メニューが紹介

(ストーリー性のある村づくりのために) [No.23]・下郷町史 沼沢火山の噴火は南会津の縄文人にどのような影響を与えたであろうか。本町南倉沢遺跡の発掘調査では縄文時代早期中葉から後期後葉の遺物包含層の黒ボク土から沼沢火山の噴出物が確認されている。沼沢火山から四〇キロ以上離れた下郷町においては噴火の影響はほとんどなく、縄文早期から後期まで引き続き営むことができる環境であったようである。縄文中期の初頭の遺物が少ないのは噴火以外の何らかの影響があったものと思われる。縄文人の食生活 縄文時代の人々は採取・狩猟・漁撈を生活の基盤としていたが、中でも植物性の食料はその中心となるもので、長期間保存のきくトチ・クルミ・クリ・ドングリ・カヤ・ヒシ・の実などの堅果物は重要な役割を果たしていたものと思われる。的場遺跡からは晩期末葉の貯蔵穴が検出されており、これら堅果物が主に地下に貯蔵されていたことがわかる。…エゴマは南会津地方では「ジュウネン」と呼ばれ、現在でも普通に栽培される植物で、荳油や郷土料理のしんごろうのジュウネン味噌として親しまれているものであるが、全国的にみれば栽培されているのは奥会津地方のほか長野県や岐阜県などの中部地方に限定されるという。「膠着したタール状の状態」がエゴマか、オニグルミかどうかの結論はいものところではないが、縄文時代の食生活が予想以上に豊かだったことがうかがわれる。[下郷町史-第7巻通史編(発行・下郷町)より出典(続く)]